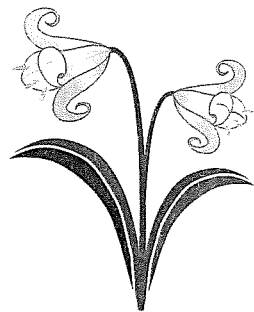


記憶の澱

中野與一



目次

- はじめに
- 姉蝶が拾った財布
- 兄熊市とウナギ獲り
- 天の畑
- 天の畑と母
- おいちゃん(一)
- おいちゃん(二)
- 父
- 夕涼み
- おわり

■はじめに

齢^{よわ} 八十八にして妻に先立たれ、九十にして老人ホームの住人となった。独居すれば不善を為すというが、私の場合、只寝転がって過ぎ去った人生の想い出を、あれこれと追い求めていくのが関の山である。

ひとつの想い出が、何んの脈絡もないまま、又別の想いと移つていく。漠とした想いのところどころに、遠い過去でありながらも、鮮明に写し出される姿がある。

それは頭の片隅に、澱^{おぼ}のように積もりたまっている記憶である。

そうした想い出を、ばらばらと兎糞の如くおもい出すまま、年代不順に書き綴つてみたい。

私は平成二十七年現在、九十歳である。父春吉、母なつゑの間に生まれた四男四女の末っ子で、母は四十五歳のとき私を生んだ。兄姉それぞれの名は上から順に、熊市、花子、蝶、栄、正子、長次、茂三である。

兄姉の大半は既に逝き、生き永らえているのは百三歳の姉栄と、九十五歳の兄長次、そして私の三人である。

草稿を書きつつも、懐かしい兄姉の顔が纏^{まと}いつき、往時の声と言葉が耳によみがえる。そうした瞬間が、随想をしたためるときには期せずして訪れるものである。

■姉蝶が拾った財布

姉の蝶（次女）は小学校三年生のとき、登校中に財布を拾った。家から学校までは三キロ近い道

のり、人家もわずかな寂しい野道であつた。姉は拾つた布製の財布を自分のカバンに入れた。そしてふだんどおり学校に着き、授業を受けた。けれども財布のことを先生や同級の子供達にも話すことなく、学校が終わるとそのまま家に持ち帰つた。

同じ村落に小西屋という小さな呉服店があつた。まさにその日、店主が大金の入つた財布を落したと大騒ぎをし、近所の人達を動員してあちこち探し廻つていたらしい。

そんなことを知る由もなく、姉は帰宅して父に拾つた財布を見せた。父は騒動のことを耳にしていたので、びつくり仰天してその財布を持ち、小西屋へと向つた。そして娘が登校中に財布を拾つて持ち帰つた経緯を伝えて詫びると、財布を渡して中身を確認してもらつた。

しかしそれで一件落着とはいかなかつた。部落の人や学校の先生までもが、父が財布を拾つて隠していたが、あまり騒ぎが大きくなつたので隠しきれず、娘のせいにした話をでつち上げたというのである。警察沙汰にもなつて、我が家は大混乱となつた。

そうすると今度は、近所の人達が動きだした。「正直者の春さんに限つてそんなことは絶対にない」と、大地主である山中の旦那に話を持ち込んだ。山中の旦那は人格者で人望もあり、村人から信頼されていた。父のことも信用してくれている人だつたので、それでは直接娘に話を聞こう、ということになつた。結局、娘蝶の話は真実であると結論され、ようやく決着を見たのである。

この事件は私の生まれる前の出来事で、私は成長してから母にこの話を聞いた。そしてその顛末は真実であると、私は納得した。なでなら私は姉蝶の性格を十分知つていたからである。

姉は堅物で独りよがり、偏屈だつた。人をあまり信用しないたちだつたが、父だけは絶対的信頼

を寄せていた。父はまた、人も知る正直者で曲ったことが嫌いであり、頼まれごとは必ずやり遂げるといふ氣質であつた。

父についての想い出は、あらためて後述することにしよう。

■ 兄熊市とウナギ獲り

長男の熊市と末っ子の私とは、二十ほども歳が離れている。兄は二十歳のとき、徴兵検査で甲種合格となり、兵役についた。入隊先は和歌山市加太にある深山重砲連隊である。軍隊生活は二年半程続いたが、休暇で家に戻ると、二歳になつた私を肩車にのせ、近所をまわり歩いた。

その後、軍隊を満期になつた兄は、家業である鍛冶屋を父と共に営んだ。兄は結婚して分家する迄私達と一緒に暮らしており、幼い弟を大切にしてくれた。暇があれば遊んでくれ、隣村の芝居小屋で、映画や芝居があれば私を連れていつてくれた。

自転車得意先廻りをするときは私を荷台に乗せ、話を聞かせてたり唄をうたつてくれた。遠方の客は私達が兄弟であることを知らず、兄に向つて「大きなお子さんがいるんやなあ」と言つたが、兄は否定もせず笑つていた。

当時、父と私は反りが合わず、冷や飯を食わされたという印象が残つている。おそらくは末っ子の私を母と兄が可愛がつたので、ねたましかつたのかも知れない。

私が小学生のころ、兄と二人で魚釣りに行った。冬場を除き暇があれば釣りにいった。釣果は川魚が主体で、たまには鮎や鯉もかかつた。

釣り場は家から二キロ程離れた小川で、紀の川の支流のそのまた支流の谷川である。山峡をぬつて岩場から岩場へ滔々と流れる清流で、淵には大きな魚が潜んでいた。しかし昭和二十四年頃、上流に造られたダムが流れを堰き止めたので水は涸れ、川底に砂が埋もり川は死んだ。

この谷川のことを村の人は「どんど」川と呼んだ。名前の由来は知らないが、おそらく周辺の地名によるものと思う。

川を遡つた先の人里離れた場所に、一軒家があつた。部落の人はこの家を「どんどの家」と呼んでいた。家には戸主である「房ん」という老人と、妻と息子の三人が暮らしていた、たしか姓は「飛渡」と言われていたと思う。娘も一人いたというが、私は見たことがない。

房んは耳が遠く、足が弱いのでいつも両腕に杖をつけていた。それでも遠くから我が家まで、わざわざ父を訪ねてきた。畑の作付けや物の相場、それに近所の様子など知るためである。

耳が遠いので、父は房んの耳もとで大声を出して話をする。私はそばにおると、房んは私の顔を見ながら頭をなでにくる、気色が悪いので私は逃げた。

房んの嫁は正常だったが、息子の喜一は少し呆けていたので皆から馬鹿にされた。その喜一が中年になつて嫁を迎えたが、その嫁も少し頭がおかしく、生れた男の子は大馬鹿だった。大声を出してわめき廻りあばれたりするので、祖母である房んの妻は困り果て、何度かどんど川に連れだし、水中に沈めてみたが殺すことができなかつたそうである。

房ん夫婦が死んだあと、残つた喜一と嫁と息子の三人は、村の民生委員の計らいで痴呆者の施設へ送られたそうである。

兄の話に戻そう。

私は十歳を過ぎたころの夏、兄は竹藪から太い孟宗竹を伐ってきた。その竹を二メートルほどに切り、先から二つ目程節をぬき、そこに油を流し込み藁束を差し込んだ。篝火を作ったのである。夜になって夕飯が済んだころ「與一、今夜ウナギとりにいこか」と兄が言った。

私は長靴をはき、懐中電灯をもった。兄は篝火の竹筒をかつぎ、ウナギを獲る金突き棒を杖に二人は目的地に向った。

行先は山峽にある稲田で、この辺の田は山すそから中腹迄段々と重なっており、一番下の田圃は畳七、八帖程の広さがあるが、上に向うほどに面積は小さくなっている。

夜道を歩きながら、兄は面白い話を聞かせてくれた。

ある百姓は田植のとき、上から見下ろしながら自分の田圃の数をかぞえた。ところが三十枚あるはずの田圃が、何度数えても二十九枚しかない、一枚足りない。不思議に思ったが、あきらめて帰ろうと思ひ、脱いであつた蓑笠を取り上げたら、その下に小さな田圃があつたという笑い話である。途中、兄は燐寸を何本もすつて、篝火に火を付けた。辺りはポーと明るくなる。そして、明かりをかざしながら、山すその田圃から順に上へ登り、沼田の稲のすき間に隠れているウナギを探す。ウナギは保護色をしていて暗い中では見つけにくいのが、明りを照らすと、目が金色に光って見える。兄はそれを見逃さず、金突きでねらいを定めて突きさす。金突きのはは四本の鋼鉄の針になっており、するどく尖った針先には戻しがついており、刺されたウナギは逃げられない。

獲ったウナギは、私の持つてきた大きな布ぶくろに放り込まれる。

こうしていくつかの山峽をめぐり、何匹もの獲物を得た。兄は袋の中をのぞき、獲物の数に満足したのか「もういいのか」といった。

それから兄は、篝火の明りを照しながら、慎重に周囲を見まわした。

前日、近所に住む知り合いから「夜、ウナギ獲りにいくときはハブに気いつけよ」と言われたことを思い出したのである。

ハブとは蝮まむしのことで、かまれると重傷になり、時には死に至ることもある。

兄の話によると、前日の夜、ウナギ獲りに行った人達が山道でハブを見つけ、その連中の一人が面白半分に、ハブを金突きで突きさし、篝火の火であぶった。暑さに弱いハブはもがき苦しむ、変な泣き声を出したそう。そのあと山道を進んで行くと、道の至る処にハブは待ちかまえており、驚いた一行は恐ろしくなり進むのを止め、引き返したそうである。

気色の悪い兄の話聞きながら、私の背負った袋の中で、ウナギがもそもそと動きまわった。私は一層気味悪くなって、帰り道を急いだ。

■天の畑(てんのはたけ)

「天」とは、私が生れ育った地方では「上にある」という意味合いである。山の上にある畑ゆえに「天の畑」と呼んだ。

まだ私が生れる前、我が家はこの山の麓にあつたらしい。家の東には竹やぶがあり、西と北側は広々とした農地で、南は小高いミカン山であつた。この家で父は鍛冶屋かじやを営み、数人の子どもを育

てた。

私は生れた家は、この旧家から三百米程離れた平地に新しく建てた家で、私はここで十七歳迄暮らすこととなる。

旧家から二百米ほどゆるい坂道を登ったところに畑がある。南向きの平地で、約四百坪（千三百二十平方米）の広さがあり、隣は松山と雑木林になつてゐる。これが天の畑であり、ここで採れる農作物によつて、我が家の台所をうるおし、家計の一部を支えていた。

何代か前の先祖は、持山の平地を切り開き、畑にしたのが今に至つてゐる。

兄熊市（長男）の子供の頃の日記によると、当時は畑に桃の木が植えられていたらしい。兄は子供ながら家の手伝いをし、桃の木に付いた害虫の駆除や、桃の実の袋かけなどした様子が、半紙にすみ字で書いてある。

私は最初に畑で目にした天の畑には、梅の木が二本あつて、周囲は麦畑であつた。

父は五十歳の前に家職を長男にゆずり、農業に専念した。

長男は別居して、妻子と共に移り住み、家業の鍛冶屋を開業した。

兄や姉が職を得て家を出払つたあと、父母と私の三人となり、私は農業を手伝つた。

父は天の畑に愛着を持ち、色々な作物を植えてつけて楽しんだ。私が畑仕事を手伝つたのは長い期間ではなかつたが、植えられた品種を覚えてゐる。さつまい芋、綿の木、大豆や小豆、えんどう豆にそら豆、大根やトマト、数えきれない程だ。

最後には柿の木が植えられた。柿の苗木は植木屋から取寄せた国富こくふという品種で、木が成長して

実をつけると、富有柿より大ぶりで、甘味もすぐれていた。私も何回か試食して味は覚えている。数年すぎた十月中旬、大きく稔った柿を出荷すべく、朝父が畑に登ってみると、

驚いたことに柿はすでもぎ取られ、木が裸になっていた。盗まれたのだ。

当時、私は遠い処に住んでおり、知人から通報をうけて災難を知った。父の落胆の姿が目に見えかねた。

天の畑の南側は鶯谷うぐいすだにと呼ばれ、春になると谷間に鶯のさえずる声が聞こえる。子供の頃父に連れられ、鶯の巣を探しに行つたこともあつた。

あるとき、父は鶯の雛ひなを二羽持ち帰つた。畑のそばで飛ぶことができず鳴いていたそうである。父は餌付けして育て、飛べるようになってから、山に放してやるといい、わら屑で巣を作つて寝かせいたが、翌朝私が見にくくと、二羽共死んでいた。

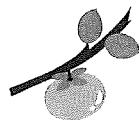
■天の畑と母

母も天の畑に深く関わっている。むしろ父より母の方が、畑に力をいれていたかも知れない。二人は結婚してから、父は本業の鍛冶屋に精をだしたので、桃づくりや野菜作りの畑仕事は、主に母が受けもつていたらしい。

母は畑を大切にし、愛着を持っていたことは、私も子供ながら感じていた。

こんなこともあつた。畑の一部は孟宗竹の竹林となつており、その隣は増井家の松山だつた。

竹林のすぐ近くに、大きな赤松があり、その根が我が竹林に侵入していた。父はそのことに腹を



たてていたが、ある年の秋、母が羊齒しだの草むらの中に松茸まつたけを見つけたのだ。それからは松の根を気にせず、毎年秋になると、松茸が生えるのを楽しみにかけていた。

天の畑は家からも近く、十五分もあればたどり着いた。子供の頃は畑に行くのが楽しく、暇があれば出向いた。畑の途中に支那栗やあけび、山桃や茸がある。又山側の土手に、弟切草おとぎりくさという薬草も生えていたので、母もそれをとりに行った。母とは連れだつて行くことが多かった。

歳月は流れて父母は亡くなり、家にはあとを継いだ兄次男夫婦と、その子供の三人だけの暮らしとなつた。兄は村役場に勤めながら、農業に従事した。天の畑も兄の所有となつた。

父は八十四歳で亡くなり、母は九十二歳まで生きた。父亡きあと、残された母は目を患い、物はつきり見えなくなつていた。それでも天の畑が気になつていたようである。

休日のある日、私が訪ねてみると母の姿が無い。兄に聞くと、天の畑へ行つたという。「目が見えやんのに？」と私が言うと、兄は母を背負つて伴れて行つたと言う。母を置き去りにしてと、私は腹を立てながら急いで畑に向つた。母の安否が気になる。

畑に着くなり「お母はん」と大声で叫んだ。母は見えぬ目で声の方を振り向き、「與一か！」と言つた。

畑を見渡すと、昔と様変りをしている。畑の周囲は雑草が延び、笹が生い繁り、畑の中も草が一杯はびこつている。母は見えぬ目で、「こんなに草を生やして」と言いながら、手探りで草を引いている。私も暫く母と一緒に草を引いた。母を見ると、目から涙を流している。少し時間がすぎ、母が疲れたようなので「お母はん、もういいなんか？」と私が言つた。母もその気になつていたので

背中を向けた。おぶつてみると母の体は軽い、そして固い。母はもう天の畑へくるのは、これが最後だろう。

又年が過ぎ私は五十歳を迎えた。墓参りを兼ね家に帰った私は、兄に「天の畑に行つてみたいんやが……」と言つた。するとそばにいた義姉が「與一ちゃん、とても天の畑へは行けへんで」という。聞いてみると、畑へ通じる山道が生い茂る草木によつて塞がふさつていると言う。それでも私は畑をひと目見たくて、兄から鎌を借り、ズボンも借りて着替えると山道へ急いだ。

途中まで近づくと、義姉が言つたとおり雑草や雑木が道を塞いでいる。私は鎌を振つて草木をなぎ倒し、徐々に畑へと向つた。

ようやくその場所にたどり着いたものの、畑の面影が見当たらない。辺り一面に孟宗竹が立ち並び人が通り抜ける隙間さえない。隣りの増井家との境界さえわからず、私は呆然ぼうぜんとして山を下りた。

懐かしくも愛おしくもある「天の畑」の話はこれで終わる。今はもうその呼名さえ忘れられ、先祖代々、営々と続けられてきた小さな歴史もおわり、無念さのみが私に残る。

兄夫婦も年をとつたゆえ、畑仕事もままならず、価値の乏しい小さな畑など、捨て去らねばならなかつたのだろう。時代は変わったのだと自分に言い聞かせながら帰路についた。

■おいやん(一)

ハブに襲おそわれたという一行の中に、「太郎(たろ)さん」という我が家の遠戚に当る人がいる。正式には歴とした「市松」という名前があるのに、なぜか近所の人らはそう呼んでいた。

血のつながらない親戚だったが、太郎さんはしょうちゅう我が家にきて、世間話しをしていく。気色の悪いハブの話を持ち込んだのもこの人である。

父母は太郎さんのことを「勝手干し」と言つて、あまり好感をもつていなかったようだが、それでもやつてくる。太郎さんは私のことを「與一、與一」と呼び捨てにしたが、私は別に気にしなかった。私は子供の頃、おいやんはすでに五十歳を越えていた。家は我が家から二百米程、坂を登つたところにある。家族はおいやんと長男夫婦、その子供六人、それに次男が同居しており、十人もの大所帯である。

おいやんの戸籍名は岩本市松で、長男は隆市、その妻こよね次男は廣一（ひろいち）と言う。長男夫婦の子供は男一人、女五人であつた。

家業は農業で、長男夫婦が営んでいる。おいやんは隠居状態で、自前の小さな畑を持つていたが、家業は長男に任せて、手伝うことはなかつた。

次男の廣一は、和歌山市にある鉄工所に勤めていたが、体を悪くして帰つてきた。心臓を患い、それに肺も病んでいたらしい。年齢は四十歳を越えており、独身である。

廣一は帰つてきて暫く同居していたが、兄嫁こよねと折合いが悪く、口論が絶えなかつたので、見兼ねたおいやんは廣一と共に、別居することになつた。

おいやんと二人暮らしで、廣一は気分が安らいだのか、体力を持ちなおし、近所に出歩くようになった。貧しくて栄養になる食物がなかつたので、川魚を獲るため、どんど川に釣りにいくこともあつた。私の家にも度々遊びにきた。私は彼のことを「廣（ひろ）さん」と呼び、将棋しょうぎや歌留多かると

などして遊んだ。

その後昭和十六年、私は十六歳で東京陸軍通信学校に入学した。翌年の夏、休暇で帰ってみるとおいやんは健在で、廣さんは療養中であつた。

昭和二十年八月、終戦を迎えた。戦争は終わったが、北鮮で軍務についていた私はソ連軍に捕えられ、北方ロシアの沿海州の奥地に連行され、極寒の地で抑留生活を送つた。それから三年間の重労働を強いられたが、運よく生き永らえて、同二十三年八月に帰国を果たした。

久し振りに故郷に戻つた私は、父母兄弟と一緒に暮らすことになつた。父母共に健在で、家を継いだ次兄は、結婚して一児を設けており、三歳上の兄も同居していた。この兄も、満州に駐屯していた陸軍に所属しており、終戦後ソ連軍に捕えられ、モンゴル方面に抑留されていたが、一年後に帰国していた。今は和歌山市内の会社員となり、我が家から通勤していた。

ところで私の父母は、戸主同志で結婚していた。父は中野姓、母は中西姓であつた。どちらかといえれば母方の中西家が優位にあつた。それ故、長男熊市は本家筋に当たる中西姓を継いで分家し、父の本業である鍛冶屋を開業した。

次兄は戦時中、海軍士官で永らく軍艦に乗っていたが、終戦時、鹿児島で陸上勤務をしていたため、いち速く帰郷していた。次兄は父に田畑を譲り受け、農業をしながら村役場に勤めていた。

おいやんの話に戻そう。おいやんと私の付き合いは何年かに渡つたが、最も親しくしていたのは昭和十二年の頃から数年であつた。私は十二歳になつた頃からである。

先に書いたように、その頃のおいやんは長男家族と別居しており、主な仕事は「水引き」だつた。

水引きとは、農業用水のお守りで六月から九月迄の期間、稲作に欠かせない水を、部落の農家に公平に配分して、水を引くのが役目である。又その他、用水池や引水のための溝の見廻りも兼ねていた。稲刈りの近ずいた十月のはじめ、我が家の戸口に立つたおいは「與一、池へいこら！」と大声で叫んだ。

おいは言う池とは、山奥にある「まな池」のことだ。この池は、山合いの谷を埋めたてて造つた大きな池で、その下側にも「ひげや池」という池がある。二つとも農業用水で、部落の農地をうるおしている。

まな池に至る山道の片側に、用水溝が続いている。この溝の低い処に水溜りがあり、水の中で黒い背をした「イモリ」が泳いでいる。溝に下りてイモリを捕まえ、手に握るとグニャグニャ動いて気が悪い。放してやると飛びはねながら水の中に逃げ込む。イモリは背中は真つ黒だが腹は赤い。池の堤が見えてくると、私は堤の上へ駆け登った。おいはゆつくりと登ってきて草の上に腰を下ろし、煙草入れを取り出し一服した。

それからやおら立ち上り、着物を脱いで禪ふんどし一丁になった。「何をするんや？」と聞くと、池に飛び込んで底にもぐり、樋ひが腐つてないか見てくるという。樋とは、池の底から溝に水を吐き出す出口で、木で造つているので、何年かたつと腐つて水がもれ出すらしい。

しばらく潜つていたおいは、浮き上がつてくると、大きく息を吸い込んだ。「気づかえない」、そう言つて土手に戻つてくると、体を拭いて脱いでいた物を身に着けながら、「與一、見てみい、山梨がいつぱえ（いつぱい）なつてらあ」と言いながら、土手の方を指差す。振り返つてみると、

私の背丈より少し高い木に、ピンポン玉位の実が、一杯になつてゐる。近づいて行き、もぎ取つて口に入れると、甘酸っぱい梨の味がする。手の届かない高さの枝に、かじられた実がいくつも見えた。猿が食べたらしい。ほかに山葡萄やまぶどうが蔓つるを延ばし、いくつかの房をぶら下げている。触つてみると実は固くて青い、熟した頃猿の餌になるだろう。

仕事を終えたおいは「さあ、いのか（帰ろうか）」といつて鎌を腰に差し、二人で来た道を帰つた。



■おいはん(二)

おいはんは働き者で好奇心が強く、家でじつとしてゐるのが嫌いな性分だつた。あちらに祭があれば行き、こちらに見せ物があれば飛んでいく。いつも一番乗りが好きで、いち早く着いて、あちらこちらを見て廻り、さつさと帰ってくる。「太郎さんはトンボの使いや」と父母は言つたが、私はその意味はわからなかつた。

そうして、帰りは必ず我が家に立ち寄り、見てきたことを、聞いたことを話してくれるが、父母はあまり信用していない。話が太袈裟おおげさだという。前日の山道でのハブの話も、まゆつばだと父が言つてゐた。

おいはんの、出かけるときの出立ちは、いつも同じだつた。夏場は暑いので、出歩かない。春、秋の時は、綿目の着物を端折り、冬場は綿入の着物の上に、トンビとかインバネというマントを羽織つてゐた。

ある年の冬、孟子ちゆうこのお不動さんへ行ってきたと言って、珍らしく私に土産物を買ってきて呉れた。「不思議な力」という手品の本である。私は試してみたがうまくいかない。丁度、兄も其処に行つた、と言うので話を聞いた。

孟子のお不動さんの縁日には、いろいろと出店が並ぶ。その中に手品師の店があつて、この本を売つていたらしい。手品師は「不思議な力」を讀み上げて実演し、観客の一人にもやらせてみる。実演のあと、一気に売上げが上がつたそつだ。ところが客足が減つてくると、本の値段を下げる。最初五十銭で売つていた本が、だんだん安くなり、最後は二十銭で叩き売りしたらしい。どうやら、おいやんは一番安くなつたところで買つたようだ。

兄の話では、実演してみせた男は「サクラ」と言つて、手品師の仲間だつたらしい。

山には四季それぞれの産物がある。山家やまがで育つた私達は、その恵みを受けて育つた。春は蕨わらび、ぜんまい、蒨ふき、初夏には山桃やまももが赤い実をつけ、秋には松茸やキノコ、栗、そして冬は山芋、山ユリがある。

春の蕨や蒨は、近くの浅い山に生えているので、母や兄たちと気軽に採りにいくことができた。しかし冬の山芋やユリ根は、山深い処でないと大きなものはない。

十一月の末頃、おいやんは山芋掘りに誘ひにきた。どんど川の奥山までは遠いので、ちよつとためらつたが、断わるわけにもいかない。母に告げてから家を出て、どんど川の川筋に沿つて進んだ。人気のない山奥へと入つていく。人が通つた跡のない道が続き、心細かつたが黙つてついでに行つた。

おいやんは立ち止り、鎌の先で地面を掘りはじめた。山ユリの根を掘っているのだ。山ユリは葉をすでに落としているが、幹は立ち枯れたまま残っている。幹が太い程球根も大きい。そうやって道々、ユリ根を掘りながら進んでいく。

やがて、目ざす雑木の生える斜面に着いた、斜面のところどころに、赤土がむき出している。イノシシの仕業だ。

おいやんは、山芋の枯れた蔓を探した、蔓が太い程芋が大きいそうだ。山芋の根は深いので、斜面の方が掘りやすい。目当ての蔓を見つけると、下の方へたどっていき株を探し出す。あとは掘り易いように、廻りの雑木を刈り取り、唐鋏とうくわで掘りおこしていく。山芋の根は、牛蒡ごぼうのように細長く、曲りながら土中深く伸びている。ある程度掘り出すと、唐鋏を置き、先の尖った金具で、根もとの土をほじくっていく。山芋は折れ易いので、慎重に土をほぐしていく。「長い、長いぞ！二尺(六十六センチメートル)はあるなあ」とおいやんは嬉しそうに言った。

「しもた(しまった)、折れてもた」と言つて山芋を取り出すと、折れ口から乳のような汁が出てきた。

同じ場所で、さらに何本か掘り出した。おいやんは満足したのか、折れないよう添え木をして布で巻き、袋に入れた。帰れば何本か分け前をもらえず筈である。

もう用が済んだとばかり、荷物を持って山を下りた。

二人の帰りの道の足は速い。途中川筋迄くると、ちらちら小雪が降ってきた。おいやんは空を見上げ、今年の冬は早いと言った。

おいやんとの想い出はこれ位である。その後、私は青年となり、家を出たので、自然と疎遠となり、消息を聞くこともなかった。ある年、帰郷して母に聞いてみると、おいやんは「もう三年前に死んだ」という。

同居していた次男、廣一が死んだため、おいやんはまた長男家族の住む家に戻り、元気にすごしていたらしいが、死んだ年の冬場の二月末、家族と夕食を済ませたあと、寝床にはいつたが、翌朝いつもの時間になっても起きてこないのが、家人が見に行つたところ、寝床の中で死んでいたとのことである。母は「おいやんはしたい放題に暮らして極楽往生や」といつて微笑んだ。

■父

父春吉は正直者であつた。他人に対しては人当りが良く、村人から信用されていたが、家の中ではよく怒り、短気で小心者であつた。末っ子の私にも甘くはなかつた。私が小学校三年になる頃まで、鍛冶屋を営んでいた。

鍛冶場では、父は左手でかたし鑪かまどを押し風を送り、右手は炭火の中で、真赤に焼けた鉄をはさまではさみ、頃合を見て引出し、金敷かなしきの上で、トントン叩いていた。鉄は焼きすぎると脆もろくなるので、火加減はむつかしいそうだ。

造るものは、農具や刃物類で、又その修理もしていた。山仕事に使うなた鉋のこや斧、又台所で使う包丁類は、切れ味が良く、長持ちするといふので、遠いところからも注文があつた。

母の話では、金敷の上でいつ迄も槌つちを叩き、仕上げるのに時間がかかつたそうだ。母は父の仕事

振りを見てきたので、あらかたを理解していたのだろう。兄に仕事を譲ってからも、「もういつぱん春さんに包丁を作ってもらえんか？」と言う人もいたそうだ。

父は又ちよつとした発明家で、田植用の回転枠や、除草機を発案して売り出した。回転枠は田植のとき、苗を植える位置と間隔の目印となり、除草機は水田で手押しするだけで、水中の草を掻きとる機械であった。

近隣の農家から、使い易く仕事が速いと好評で、注文は絶えず、父と兄が夜遅くまで働いていたことを覚えている。

その後、評判を聞きつけた農機具屋が、見本にしたいと製品を買いにきた。そしてその業者は、よく似た農具を多量に造くり、安い値段で売出すことになった。つまり、発案を横取りされたのだが、田舎者の父には、特許の申請など、考え着かなかつたのだろう。

鍛冶屋をやめたあと、父は母とともに百姓仕事に戻った。兄や姉達は、既に家を出ていたので、末っ子の私はその手伝いをした。

父は天の畑が好きで、力を入れていた。暇があれば畑に向いた。私も父に従い、手伝いをした。その頃の畑には、二本の早生柿があり、薩摩芋や野菜を植えていた。秋が近づくと早生柿が熟し、薩摩芋も土中でふくらんでいる。戦時中の甘味のない時代、柿をもぎ、薩摩芋を焼いて食べるのが楽しかった。

何年かたち、私が成長して家を去ったある年、父が丹精こめて作った柿が、出荷前に盗まれた事は前に述べた。



■夕涼み

私は小学生の頃、我が家には近所の人達が集まった。隠居した父には暇が多く、話し好きで付き合いが広かったので、誰もが気易くくれたのだろう。

私には四人の姉がいて、長女は嫁いでいたが、あと三人はまだ未婚で勤めに出ていた。休日には三人とも家に戻ってきた。村の若者たちは夜遊びといつて、姉達を目当てに押しかけてくる。多いときには広い土間がいっぱいになり、居間にまで上がり込んでくる。

父も母も嫌がらず、一緒になつて若者達と話をする。気の利いた若者は、何か手土産をもつてくるし、大勢集まると「あみだクジ」をして、負けた者が菓子など買いにいく。姉たちのお蔭で、私もいろいろ恩恵をうけた。

しかし暫く続いた若者の夜遊びも、姉たちが嫁いでからは、誰も来なくなつた。

田植が終わり、七、八月の農閑期になると、我が家は夕涼みの人で賑わう。私の家は高台にあり、風通しがよく、庭が広いので夕涼みに持つてこいだ。

夕方になると、父母は大きな涼み台を庭に持ち出す。蚊いぶしの準備は私の役目で、鎌をもつて、近くに生えている鎮台草ちんたいくさを刈り取ってくる。鎮台草は背丈が高く、固まつて生えているので刈るのは容易だ。庭の片隅に大きな土鍋がある、底に麦わらを敷き鎮台草をのせる。

人が集まつてくる少し前に、麦わらに火を付ける。麦わらが燃え上ると、鎮台草を焦がし、朦々もつちとした煙が、庭先一杯に立ち込める。

夕涼みにくる人達は、みな年寄りばかりで、歩きながら大きな浚団扇しゅうだんせんで、バタバタと蚊を払いな

がらやってくる。

いつもくる常連で、今も憶えている人は、吉（よつ）さん、安（やつ）さん、

光（みつ）さん、そして大地主の後家さんである。

四人共、酒を飲んで、ほろ酔い気分で作ってくる。話題は仕様しようもないものばかりだ。庚申こうしんさんの裏山の狸は、子供を連れてぞろぞろやつてきて、供物を食べ散らかすとか、稲荷さんの狐は、人を騙だますという話。

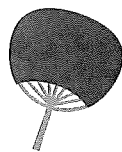
吉さんの親戚の若者が、夜おそく稲荷さんの山道を通っていたところ、自転車に積んでいた寿司箱が空になっていたという話。又、同じ道筋で酒に酔った男が、狐に騙だまされて、肥溜こたぬの中に入り、風呂を使っていたというような話を、誠しやかに語っている。その他、墓地ぼちから人魂ひとたまが飛んで出る、というような今では考えられないこと、面白そうに話していた。

そんな話がおわり、吉さんが飲み屋で、女性と遊んだ話を始める。すると父が「與一、もう寝にいけ」と言つて、私を追払う。私は、もつと聞いていたかつたが、父に言われると仕方がない。

秋口になって、少し涼しくなってきた頃、顔ぶれが変わる。場所は涼み台から縁側となり、火鉢が用意される。当時の人は、煙草きせろを煙管きせろで吸つたので、火種となる火鉢が必要だつた。

話題は秋の収穫で、稲作の出来具合が主であつた。山持ちは松茸の生え頃の話もする、松茸は赤松のある松林で、松の木は年数がたち、大きくならないと生えてこないのです、その時季が気になる。

我が家にも松茸山があつた。天の畑に連らなる山で、年代の赤松が多く、羊歯しだが生え繁り、松茸には好条件の山であつた。



鉢巻山はちまきやまと言ひ、松茸以外の茸も採れ、時季がくると、父は毎日のように山に入った。私も父従ひ採りに行った。

頂上の赤松の周囲に、虹を書いたように丸く松を囲んで、松茸が生えている。父は、こんなに良く生える山は滅多にないと言つた。

山から持歸つた松茸は、ゴミを取り除き、羊歯を敷いた専用の籠かごに入れ、市場に出す。

父はリヤカーに籠をのせ、市場に行く。私も付いていつた。市場は駅のそばの倉庫で、持込まれた松茸は、列をつくつて並べられる。集荷が終わつた頃、仲買いの商人は何人が現われ、競り市が始まる。最初の底値から始まつて、段々金額が競り上り、一番高値となつた処で、荷主と商人の間で取り引き終る。

松茸のお蔭で、父も良い収入になつた。

余談になるが、市場のそばの貴志駅は、和歌山市と結ぶ電車の終点で、近来、この駅の猫は「たま駅長」として有名になり、外国からも取材に訪れ、我が国でも新聞やテレビで放映され人気者となつた。しかし、平成二十五年の某日、たま駅長の死がマスコミで報ぜられ、葬儀には千人以上が参加し、その功績により、副社長に昇格したそうなる。

遠い昔の想い出は、書き始めると止めどがない。それゆえ、筆の置きどころに迷う。

最後に、ちよつと珍しい話題をもつて、この小文を締めくくりたい。

■ おわりに

まだまだ記したい思い出が一杯ある。優しかった母、亡き妻、そして兄や姉たち。

しかし、一旦は筆を置くことにしよう。

過去に私は、シベリア抑留を記録した「抑留生活」、そして紀の川小史として「狂う川」をそれぞれ質素な本に仕上げた。前者は苦しく惨めな思い出であり、後者は以前住んでいた地域の長老から聞いた話を纏めたものである。両者を各五十部印刷して友人、知人に配り読んで頂いた。

今回は暇ごとに浮ぶ思い出を雑駁な文章に書いてみた。拙い文章であるが、読んでくださる人があれば有難く、また嬉しく思う。

了

